

日本の住居形態にみる価値表象

—異文化の視点をベースにして—

王 勇萍

キーワード 住居形態 価値表象 異文化視点 構造 建築 風土

要 旨

住居は人間生活の器として、その形態が風土（土壌、気候）、風俗、住まう人間の心理構造、生活の在り方などに緊密に関係する。本稿は伝統的な日本の家、即ち日本の木造家屋に体现された日本民族の社会と生活に対する審美、倫理、そして道徳といった日本民族に属する文化の諸相を読み解きながら、住居形態における日本人の価値観や志向を再検証することを目的とする。そのため、広く博物学や、工学、地理学、社会学、女性学、民族学などの諸分野の日本の家についての所見を参照しつつ、家の構造や材料、色彩や装飾など、家に付与された日本的性格を整理・分析し、検証する。さらに、日本文化を多面的、複層的に見るため、本稿は異文化の視点をベースに、日本人研究者による研究成果と照合しながら、日本の住居形態に表象された価値的関心や志向を取り上げ、再検証する。これもまた住居形態や構造の分析から住まう人間の「生き方と価値観」を考察するもう一つの学際的アプローチの試みである。

1、はじめに

いつの時代であれ、住居は人間が生活を営むための器であることには疑いが無い。逆に言うと、人間生活を営む器としての住居は周辺（住居内の人間と近隣、自然、そして、生存に関わる土地など）の自然・社会環境とも緊密な関係を有しているため、簡単に取り替えることができない。住居はそこに住まう人間が、自然災害から身を守り、互いの感情を示しあい、生存や繁殖の営みを行なう場所であるがゆえに、いつの時代においても、そこに住まう人々の生活に対する審美観や倫理意識を反映する。まさに住居は、端的に「その時々々の社会情勢や人々の生き方、価値観を投影したもの」（多田井幸視『住まいと民俗—住

意識の変容一』岩田書院p.3)に他ならないと言ってよい。じじつ、世界人類の歴史を振り返ってみると、自然条件の変化や、民族および社会経済（原始時代では、狩猟や採集）の発展によって、住まいの形態が違ってくる。同様に、日本の歴史においても、社会構造の変化や、産業経済の発展につれ、日本人の住まいの形態は次第に移り変わってきた。

本論文が取り組みたいのは、伝統的な日本の住居、すなわち木造家屋に体现された日本民族の社会や生活に対する審美観や倫理意識—日本民族に属する文化—を読み解きながら、住居の形態を基礎に培われてきた日本人の価値的関心、あるいは志向的価値を明らかにすることである。本論文は広く博物学や、工学、地理学、社会学、女性学、民族学などの諸分野の知見を参照しながら、日本家屋の構造や材料、色彩や装飾などにより、家に付与された日本の性格を整理・分析し、日本の家（住居）とも密接に関連した日本人の価値意識や志向を再検討しようと図るものである。その際、筆者がとりわけ関心をそそられるのは、外からの目、即ち、異文化の視点に映った木造家屋における日本の性格というトピックである。なぜなら、住居が人間生活の器として、その風土（土壌、気候）や風俗、住まう人間の心理構造や生活の在り方などとも相関的なものである以上、そこに住まう人間の志向的価値の実態に接近するには、内部からの眼はもちろん大切ではあるが、外部からのアプローチもまた極めて重要だと考えられるからである。

次章では、日本の住居形態が日本人のどのような価値的関心、あるいは志向的価値を表象したものであるか、まずは二人の外国人研究者、すなわちE・S・モースと、ジャック・ブザー＝マサビュオーのそれぞれの著書『日本人の住まい』と『家屋（いえ）と日本文化』を中心にして、整理と分析を行ないたい。その上で、さらに日本人研究者による研究成果とも突き合わせながら、日本の住居形態に表われた価値的関心もしくは志向的価値を検証する。これもまた住居形態と構造から、そこに住まう人間の「生き方と価値観」を考察するもう一つの学際的アプローチの試みである。

2、異文化の視線から見た日本の家屋

2. 1. E・S・モースと『日本人の住まい』

異文化の視点から伝統的な日本の家の形態や構造について論じようとする場合、すぐ想起されるのが、明治維新後、多くの外国人が様々な理由で、日本の土を踏んだという事実である。そして、それらの外国人の中には、かなり多く

の知識人も含まれていた。彼らは、異文化の視線で、日本社会と日本国民の生活事情などについて、様々なかたちの研究や記述を残した。その内、日本人の住まいに関する研究として評価されているのはアメリカ人の博物学者E・S・モースの『日本人の住まい』（原著名は、Edward Sylvester Morse : Japanese Homes and Their Surroundings 1886年）である。

モースは「特異で美しい芸術作品を収蔵している日本家屋の本質を」（p.5）知りたくて、日本人の住まいに関する研究を始めたという。そして、従来のような住まいについての一般論ではなく、日本人の住まいの特徴や建物内部の構造及びそれに関連する周囲の環境について、「全般的」、且つ「細部」にわたって、観察を続けた。モースの日本家屋に対する第一印象は、「外見からして弱々しく、また色調にも乏しい」（p.21）、「貧乏くさく見える」ので、「失望の限り」というものであった。モースは日本の家屋をなるべく客観的、公正に観察し、報告するため、著者本人による「蝦夷の北西岸から薩摩の最南端に至る」旅中に描いた図を多く用いている。さらに、モースは、日本の「最貧困階級」の民家から、中産階級の家屋、及び「富裕階級」の居住する屋敷に至るまで、日本の家屋の構造や、そこに住まう人々の生活ぶりを多岐にわたり、細かく観察して、比較検討した。

モースは日本の家屋について、「日本の家屋の開放性と近づきやすさとは、それ自体が日本の顕著な特質である」（p.11）と述べ、中国や、朝鮮などの日本と近い文化圏の家屋と比較分析した上で、日本の家屋は「日本人による典型的な産物の一つである」と結論した。

日本じゅうを旅行してみて痛切に感じられるのはその住居にも表れるように、中流的な、と呼ぶべき階級が存在しないということである。……しかし、このような家は雨露を凌ぐだけという家—物品類も最低必要なものだけという貧困そのものの家—が立ち並ぶなかで、何百軒に一軒という割合で見かけるだけである。そのような小屋まがいの家に居住している人々はねっからの貧乏らしいのだが、活気もあってけっこう楽しく暮らしているみたいである（p.70）。

このようにモースは、日本の家屋の外観からそこに住まう人々の生活に対する態度を観察した。モースはまた、家の庭や家内の装飾などに日本の美的情緒を発見した。彼は、たとえば、日本の家屋で大通りに面している側は「平凡陳腐」だが、庭園に面している側は「絵画的趣向」が凝らされており、「いかにも平凡が目立たない家であっても、いったん中へ入ると、繊細優美を極める彫刻

の逸品」(p.26)などが置かれてあることに驚かされたと述べている。

仮に、このような日本の美的情緒は単に上層階級のもののみで、日本人の審美観の普遍とは見なせないとしても、また同時に、日本の下層階級の生活ぶりに対しても、モースは観察を怠っていない。「ある村は、家々の前に綺麗な花壇をしつらえており、風趣と愉楽との気分に溢れ、ことのほかさっぱりして美しい感じをたたえて」(p.19) いると言ひ、さらに、日本の「極貧ではないにしても、やはり文字通りの貧乏」(p.70) な家には、狭いが、「三、四人の家族程度の家族が、平穩にしかもこさっぱりと暮らしている。かくて、少なくとも日本においては、貧困と人家の密集地域とが、常に必ずしも野卑と不潔と犯罪と誘発とは限らない」(同上) と記している。

ここには、要するに日本人の家は平凡で貧しいが、それを美しくすることこそ、日本人の美的情緒の自然な発露ではないかという判断が示されているのである。日本では、たとえ貧しそうな家に住んでいても、「野卑」や「不潔」とは無縁であり、「犯罪」も誘発されなかったというのは、ジャック・プザー＝マサビュオーが『家屋(いえ)と日本文化』に述べるように「日本の家は、まず何よりも、その形態の中に刻み込まれた価値を住人に伝え」(p.275) ているがゆえであろうと思われる。つまり、その背後には日本人の倫理観や道德意識が潜んでいるのである。日本の家は、「調和」があって、「古くからの茶の湯の理想や禅の掟が、生活の枠組みである家のあり方を通して、住む者の立居振舞いにしみこんでいく。造形上の記憶に訴えかけて、住人に、あるべき行動の図式を教え込む」(p.275-276) ののである。

したがって、モースの目からみた日本の家屋が表象している価値観や関心は「美しい貧相」、「開放的な平穩」と言ってよかろう。モース本人の言葉を借りて言うなら、「日本の家族は、このような家で、こざれいかつこちよく暮らしている」(『日本人の住まい』p.76) ということになる。ここには、家の形態や構造を通してそこに住まう家族の生き方が見抜かれているのである。

2. 2. ジャック・プザー＝マサビュオーの『家屋(いえ)と日本文化』

フランス人の地理学者ジャック・プザー＝マサビュオーはモースより随分遅く、1960年に、日本を訪れた。彼が日本に来た最初の目的は日本の地理と社会を研究するためであったが、実際、日本の人々と接触しているうちに、「日本では、伝統的な家屋(民家)は、日本の文化遺産として、不可欠の要素の一つ」

(p.17) だと考えるに至り、やがて、日本の家屋についての研究を行って、「日本の伝統的な文化、制度など」を究明する研究書『家屋(いえ)と日本文化』

(原著名はJacques Pezeu-Massabuau : La maison traditionnelle et la culture japonaise)

を書き表した。

プザー＝マサビュオーはその著書の中で、地理学者の専門知識を持って、日本の地理、気候、家作りの素材、間取り、色彩と家の中の装飾など、様々な角度から日本の伝統的住居を観察し、フランスをはじめ他の国々の住まいと比較して、日本の伝統的な家が表象する日本の文化を論じた。氏の論点は、およそ下記の2点に絞ることが出来る。

① 異なった感覚の場としての家

日本の伝統的な家は、そこに住む人々を風雨や自然災害から守るための場であるというよりも、自然の威力を認識し、人間の精神を昇華させる教育をすることを大事にする場である。

② 文明の価値観を保持するものとしての家

日本の家の作りや構造、材料、色合いなどにより形成された独特の形態と、独特の美的雰囲気、日本の文明を表象している。すなわち、日本の家は「日本の文明が作り出した特有の生活環境を各人に提供して」(p.26) いるのであって、「家はそれぞれの国において、その国民によって本質的と考えられた価値観を保持している」(同上) ものだという観点から、日本の家は「何世紀にもわたって、日本の文明の諸価値の全体を体现」(p.27) してきたと論じている。

さらに、日本の伝統的な家屋が表象している文化について、プザー＝マサビュオーはこう纏めている。

日本の住居は、お互いの人間関係を乗り切っていくための生活の規則を教育しているのである。寒さや暑さから身を守ってくれるのではなく、寒さや暑さに耐えるための共同体的な規律を教え込もうとしている。地震や台風に対しては日本の住居はもろく、それは地震や台風にあっても生き延びていくための、厳格さ、助け合い、人間の力の限界を知ることなどの精神的価値を維持していくのに適している。そこに住んで、日々の行為を実行しさえすれば、つまり生活しさえすれば、日本の住居は真、美、善についての規則を教え込んでくれるのである。日本の住居は秩序であり、記憶である (p.320)。

確かに、日本では“地震、雷、火事、親爺”という言葉の通り、自然条件が厳しい。それにもかかわらず、日本の伝統的な家屋が呈する脆弱さ、簡素さ、及び貧相さの理由とは何なのか。じっさい、木や藁、土製の壁、紙でできた障子や、襖など、どれも地震や火災などの大きな災害から身を守るだけの強度がないし、それどころか、伝統的な日本の家屋の開放的な作りは自然の寒気す

ら遮断できないほどのものである。そこで、プズー＝マサビュオーは、このような脆弱で貧相な住居形態が何世紀にも渡って存在し続けてきたことはそれが日本の「文明の凝縮体」であるからだろうと解釈するのである。

したがって、プズー＝マサビュオーの目でみた日本の家が表象している日本人の価値観や志向は「秩序」と「集団」ということになる。

以上、異文化の目で見た日本の家屋の表象について、そのいくつかを整理した。他にも、日本の伝統的建築の考察を通して、日本文化、或は日本精神を追求する論考は山ほどある。その中の多くは日本人研究者により書かれたものである。例えば、宮川英二の『風土と建築』は建築を文化の一つの姿と見て、「風土の面から日本の建築を」(p.1) 考察した。その結果、伝統的な日本の建築の簡素さ、自然との親和、及び自然との連続性などの特徴から、「日常生活の芸術化、身辺的些事の美化は日本文化の特徴であった」(同上p.260) と論じている。滝沢健児は『すまいの明暗』の中で、日本の伝統的な建築の素材、明暗、及び建築の則す理念などの研究から、人と物、及び自然との関係—「曖昧」、「未分化」—が表わす日本文化、あるいは日本の精神について追求した。多田井幸視は民俗学の視点から住まいに対する住民の「意識」や「考え方」の変化、即ち人々の住意識の変容を追跡し、『住まいと民俗—住意識の変容—』にまとめている。また、西川裕子は「住まい」「家庭」「女性」という視点から、近代における生活構造の変化や住まいの変遷、そして、家族、とりわけ家庭の中の女性について論じた。『住まいと家族をめぐる物語—男の家、女の家、性別のない部屋』は、そのひとつの成果である。

3、伝統的な住居が育んだ日本人の「調和・集団志向」

3. 1. 自然と調和

エドワード・S・モースもジャック・プズー＝マサビュオーも、日本の家屋に対する研究の手法や視点はそれぞれ異なるが、伝統的な日本の家が表象している文化的価値に対する評価はむしろ一致している。

要するに、伝統的な日本の家は人間生息の場所として、住む者を風雨などの自然災害から守り、心身を安らげ、享樂を享受する場としての物理的な役目が弱い。その反面、人間を教育する場としての文化的な役割を果たしていると結論できる。伝統的な日本の家が伝えているのは日本人の自然との融合、素朴さ、勤勉さ、忍耐力の強さ、謙遜さ、他人に対する思いやり、および自然から与えられた豊かな精神世界—日本人独特の繊細さ、または柔らかな美的情緒—

といった性質である。

さきほども少し触れたが、伝統的な日本の家屋は木や藁などの自然材料で出来たものである。それには日本が草木の豊かな国であることなど様々な要因があるが、最も根源的な理由はプザー＝マサビュオーの言うように「日本では、建築形態や用いられる建材の簡素さ、貧しさが、美の本質的条件の一つになっている」(p.22) からであろうと思われる。即ち、「人間は自然の一部である」とする人間と自然との調和を尊ぶ日本人の価値志向である。

日本文化の代表として、これまでも多くの研究者の関心を惹いてきた日本の茶室はその典型的な建築であるとジャク・プザー＝マサビュオーは主張する。

この種の建築の理想形態は茶室であって、藁か木の皮で葺いた屋根に土製の壁の粗末な小屋に過ぎないこの茶室は、節制と儉約の完璧なイメージになっている。最初はもっと快適な家を建てる資力がなかったために、こうした粗末な小屋で生活せざるを得なかったと思われるが、後に、この簡素な住いを美しいと感じるように、すべての日本人の感性を強制すべく、あらゆる知的努力、特に美術と詩の領域における努力が傾けられることになる。水墨画、詩歌、『徒然草』のような文芸作品やその他のもろもろのものが、人はできるだけ自然に身近に暮らし、何よりも自然のままの素材を愛すべきであり、自然に逆らっていたのでは何ものも真に美しくなく、真に価値あるものではないと教え込んできた。この評価基準が住居に当てはめられると、建築物はできる限り単純なものであるべきで、それに用いる素材はあまり加工されていないもので、何よりもその自然な美しさゆえに選ばれたということになる。絶えず自然に親しんで暮らしていれば、暑いとか寒いといったことは二の次になり、四季折々の眺めが与えてくれる美的喜びによって、そんな些細な不便など超越してしまうことになる (p.23—24)。

このように、日本人の自然との融合的な関係は、実は、すでに家という建築に用いられる自然の素材から始まっている。自然材料の柔らかさ、簡素さが伝える美的感覚はそこに居住する日本人を「物質的な快適さを軽視し、より洗練された感覚を」(p.24) 好む傾向へと導いたのである。

3. 2. 開放的な日本家屋の構造

日本の家の空間は開放的である。日本の伝統的建築には深い軒があり、それは家の外延部として、自然と繋がるのである (図1.1を参照)。「日本の建築空間

は内部の空間と外部の空間とが必ずしも、はっきりと峻別されていない。むしろ連続性こそ、日本建築の重要なポイントである」と宮川英二は言う（『風土と建築』彰国社p.156）。



図1.1 日本の民家(福島県いわき市「暮らしの伝承郷」にある日本民家の模型)

図1.2が示すように、欄間の障子と廊下の無双窓を開けたら、家内部の空間は外へと伸び、内部の空間と外部の空間が、渾然一体になるのである。このように、かつての日本人は自然と一体になることを通じて、心を豊かな自然に満たされ、深遠な、自然からの苦しみを超越できる人間力を鍛えたのである。宮川氏は「軒と縁は日本文化の母体」(p.162)で、「日本文化の伝統を形成する上に極めて重要な役割を果たしてきた」(p.164)と述べている。

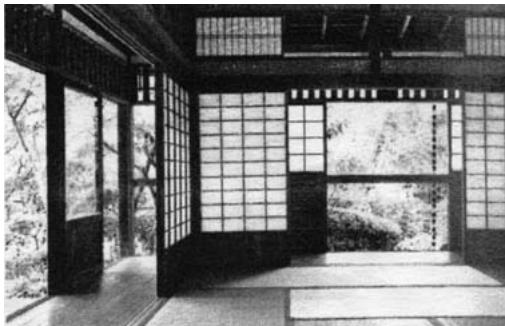


図1.2 書院

図1.2は『住空間の家族学—「心・体」感覚で考える』による. p.18

伝統的な日本の家は外部に対して開放的であると同時に、内部も開放的であ

るといわれている。「かつて、畳の部屋は和室と言う名で呼ばれていた。独立性の乏しい誰のものでもない部屋であった」（『すまいの明暗』平凡社p.42）と滝沢健児はいう。また、この問題について、山田初江は『住空間の家族学』の中でこう述べている。「和室は、家具のない空の空間に、座卓と座布団を整え客間に、寝具を敷いて寝室にと、モノを設えることで、部屋の機能の転換を図ることができる」（p.18）。確かに、伝統的な日本の家には機能の“未分化”に起因する一種の“曖昧さ”、或は“不安定さ”が存在している。はっきりとした区分がないため、あらゆる面で、家の中の自分の居場所が“不安定”な状態になっている。そこでは、あらゆる面で、家族の他の成員と仲良く暮らしていくための譲り合い、謙譲、あるいはまた服従するという性質が平和に生存するための必須の条件になってくる。このような家族関係が社会という場に投影されると、「家」という組織の性格がそのまま「集団志向」という姿をとって表われてくる。このような「集団志向」的な家族関係の中では個人意識の確立は難しいことであろうと思われる。家族内関係はもちろんのこと、ひいては家族と近隣、地域や社会との関係もまた同様であるものと考えられる。

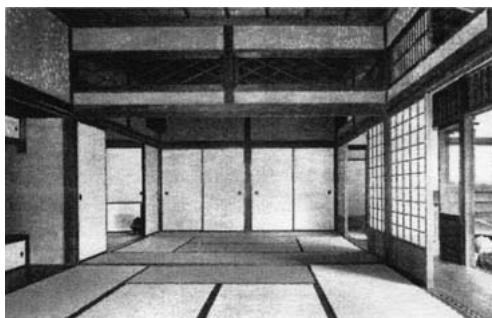


図1.3 書院

図1.3 は『住空間の家族学—「心・体」感覚で考える』による. p.18

このように、かつての日本人の人間関係は家の中の「集団志向」的な家族関係を出発点として、近隣へと、そしてまた地域や、最後に社会にまで広がっていく。そのことが、また翻って、社会慣習として、地域や近隣を通じて、家族にも要求される。こうして、定着した人間関係が、長年にわたり、社会の倫理や道徳として、かつての日本人の価値体系を支配してきたのだと言える。

伝統的な日本の家は、一旦障子と襖を外すと、家全体が広々とした一つの空

間に変貌する。それは、図1.3が示す通りである。そのおかげで、日本の家は実にさまざまな機能を果せることになる。例えば、様々な行事を行う場にもなるし、一つの共同生活の場としても活用できる。仮に、障子や襖を外さなくても、軽い障子、軽い襖のため、遮られるのは視線だけで、音は依然として筒抜けで、一つの部屋としては、独立性に乏しい。

このように、日本の家屋の空間利用上の「曖昧さ」、「不安定さ」、そして「開放的」という性格は伝統的な日本の家屋構造のもつ独特な特質と受け止めることができる。日本の家の持つ特質こそ、日本文化の根底にある内斂・調和という特性を培ったのだと思われる。

伝統的な日本の家のこのような性格こそ、これまで異文化の受容を容易にしてきた要因のひとつになったのではないかと考えられる。伝統的な日本の家の脆さには様々な文化的意味が含まれていることは上述した通りだが、古来、生活水準を向上させることは、人類の通文化である。その意味で、伝統的な日本の家が物理的に脆弱であることから、日本人が絶えず外国の技術や文明を取り入れる努力をしてきた行為の理由が理解できよう。ただし、外国の技術や思考方法の導入がただ闇雲にというのではなく、日本固有の伝統的な文化・文明を保持しつつ、徐々に変容させながらであるという点は注目に値すると思われる。

なるほど、日本の歴史の歩みを振りかえってみると、古代中国文化の摂取から、明治における西洋文明の受容、そして、戦後の現代アメリカ文化の受け入れ等、すべてが日本人の積極的な異文化受容を表したもののばかりである。だからと言って、何世紀にもわたる異文化受容の総合体が、そのまま現在の日本を形作っているというわけではない。その理由の一端を、現代日本の代表的な住居形態であるマンションを例に見てみたい。マンションはその材料から、家の構造、そして間取りに至るまで、伝統的な木造家屋とは大きく異なり、現代的な暮らしの理念を取り入れたものである。まず第一に、マンションは「鉄筋」や「鉄筋コンクリート」で作られた一人間を自然の災害から守れる一頑丈な建築物である。また、マンション暮らしは食卓や椅子、ベッドなどの家具によって成り立つというように、ありとあらゆる意味で、西洋化、現代化、そして都市化の象徴と見なされる。ところが、マンションの中に入ると、玄間、畳、襖、障子という日本文化の基礎をなす伝統的な日本の家の要素がそのままに保持されている。結局、マンションの表象する日本の現代化、西洋化はマンションの外壁のごとき表面だけに限定されており、その中身は、西洋化と見なされる家具と、日本家屋の伝統である畳、襖、障子との折衷形態に他ならない。要するにそれは、まさに宮川氏の言う通り、「日本の現代建築は、観念では西欧的抽象

論理に基づいて、感覚や生活環境の実感では依然として伝統的尺度による一という思考と行動のうえでさまざまな分裂や矛盾を露呈している」(『風土と建築』彰国社p.269) のである。

以上、伝統的な日本の家が「不安定」で「開放的」であるという空間利用の特徴によって、そうした環境に生まれ育った人間は個人意識が確立しがたいことを論述した。それは同時に、個人意識が薄い反面、集団意識が強いということでもある。さらにいえば、「個」が存在しない一方、「公」が包括的な意味を持つと理解できる。その意味で、かつての日本人にとって、自分の「個」への意識が希薄であるために、他の「個」への意識もまた無頓着に過ぎたというのも、止むを得ないことだったのかも知れない。かくして、伝統的な日本の家が伝えてきた文化的イメージは、「美しい貧しさ」による「自然との調和」、そして、「開放的」な空間利用による家族関係一ひいては、人間的コミュニケーションの「曖昧さ」、「個人意識」の欠乏、そしてその反面としての「集団意識」の強化などに集約されそうである。

結びにかえて

元来文化は地域に根差した民族の性格によってかたち作られ、価値概念の基底をなすものとして、各人の行動を規制し、民族の歴史を刻んできた。しかし、近代文明や科学技術の発展・利用により、文化の民族的性格が世界的普遍的な価値概念と接触し、これらとどう対質するのかという新たな課題に直面することとなった。そこで、自民族の文化や思考様式を再確認する必要に迫られ、その都度、異質な価値観とも照合することを通じて、自民族文化の特質を検証するとともに普遍的な価値概念との連携や文化変容の可能性をも追求することが重要な問題となってきているものと思われる。そうした観点から、本稿では、伝統的な日本の住居形態を巡っての外国人研究者の言説ならびに日本国内の研究者による研究成果を参照しつつ、住まい方に表われる価値表象につき、学際的アプローチを用いて再検証を試みた。その結果、伝統的な日本の家が、様々な意味でそこに住まう人々の「調和的な集団志向」を示していることを確認できた。

しかしながら、日本の住居形態は近・現代になって、西洋の普遍的価値概念と結びつき、大きな変貌を遂げている。マンションが表象する日本人の「生き方と価値観」については、先にも少し触れてみたが、その変容の具体的な様相に関しては、なお厳密に追求する必要があるものと思われる。次の課題にした

いと思う。

引用文献

- 多田井幸視 (2002) 『住まいと民俗—住意識の変容—』 岩田書院
E・S・モース (1991) 『日本人の住まい』 齊藤正二・藤本周一訳 八坂書房
ジャック・プズー＝マサビュオー (1996) 『家屋 (いえ) と日本文化』 加藤隆訳
平凡社
山田初江 (2003) 『住空間の家族学』 彰国社
宮川英二 (1979) 『風土と建築』 彰国社
滝沢健児 (1982) 『すまいの明暗』 中央公論社

参考文献

- 宮本常一 (2007) 『日本人のすまい 生きる場のかたちとその変遷』 農協文
大河直躬 (1986) 『住まいの人類学』 平凡社
桑原稔 (1979) 『住居の歴史』 現代工学社
西川裕子 (2004) 『住まいと家族をめぐる物語:男の家、女の家、性別のない部
屋』 集英社
渡辺武信 (2004) 『住まいのつくり方』 中央公論新社
田中辰明 (1995) 『住居学概論』 丸善株式会社
清家清 (1993) 『新しい時代の豊かな住まい方』 同文書院
住田昌二 (1984) 『現代住居論』 光生館
目黒依子 (1987) 『個人化する家族』 勁草書房